

# 1000字小説

君島恒星



## はじめまして ...目次

---

だいたい1000字の小説くんたちです。

自分と違う世界を覗いてみたいと思ったことはありませんか？

ちょっと小さな創作の世界に入ってみるのもいいかもしれません。

小さなドラマが小さな刺激になりますように！

### ...目次

- 「スクランブル」 ..... 「あら？ あの子！」 ...妻は熱い視線を送った...
- 「チョコの味」 ...彼女を一目見て、甘い予感が僕を包んだ...
- 「家庭教師初日」 ...美里は無表情でベランダから卵を投げていた...
- 「見なれた笑顔」 ...捨てぜりふを残して、美代子が部屋を飛び出して行った...
- 「読書好き」 ...2冊の同じ本。僕たちのデートは、こうして始まる...
- 「正当性」 ...右足はアクセルを深く踏み込んでいる...
- 「7時35分」 ...7時35分、バス停に並ぶ人の列の中...
- 「小さくなあれ」 ...夜道に女性がひとりで...
- 「ダウンジャケット散った」 ...「暖かい！」と言った。
- 「夜のリフレイン」 ...今夜も続くあなたの罪...
- 「親の身勝手」 ...現実辛い...
- 「吸血の時」 ...やっと会えた...
- 「再会」 ...あのときの甘酸っぱい思い出...
- 「クリスタルアート」 ...秘密の趣味...
- 「時間のない丘」 ...中学の頃...そして今...
- 「秘境の巫女」 ...秘境の温泉地での失踪の謎は...
- 「15年目の真実」 ...アイドルの自殺...そこで芽生えた真実。
- 「キュートな殺人鬼」 ...彼を殺したという電話...僕は...
- 「ふたりの笑顔」 ...電車内の口論...その結末は...
- 「今だけを...」 ...未来のために？ 彼女は言った...
- 「朝日の中に」 ...あの時の、彼女が...最後の朝に...
- 「お姉ちゃん消えた」 ...小さな頃の記憶...それは嫉妬...
- 「理想の面影」 ...理想の面影を持つ女性を追う...そこには僕の過去が...
- 「愛しきもの」 ...映画同好会で撮影した作品の中に、彼女の作品が...



### 「スクランブル」

君島恒星

「あら？ あの子！」

信号待ちで停車していた車の中で、妻は熱い視線を送った。

「本当だ。似ている」

「わたしを見たわよ。目のあたりがそっくり」

「僕を見た。笑ったよな。今笑ったよな！」

「わたしたちに何か言おうとしているのかしら？」

その少女は7年前に交通事故で亡くなった娘の麻衣子に似ていた。

事故にあったのが7歳の時だから、生きていれば14歳になっている。スクランブル交差点を歩く少女は、ちょうどその年頃だったので、深く切ない記憶を刺激した。

そして僕たちに微笑みかけた。

少女は指の爪を噛んだ。

麻衣子がよく、困ったときにやっていた癖のように……

スクランブル交差点が、ものすごく長い道程に感じた。

車に乗ったお母さんとお父さんがいる。

自然に歩こうと努力しながら前に進むと、ふたりの視線がわたしを射る。

やっぱりわかるのかしら？

娘だって……

わたしはお母さんに微笑みかけた。

驚くお母さん。

お父さんもびっくりしている。

きっと半信半疑よね。

これでは？ 爪を噛んでみる。

いつもやめなさいと言われていた爪を噛む癖。

涙が出てしまいそう。

気がつけば交差点を渡り終わっていた。

「最後の望みが、両親の前を歩きたいとはね！」

背中に羽根が生えているエンジェルが、わたしの前に現われた。

「これで、あなたもりっぱに進化できる」

わたしの背中に、真っ白な羽根が生え始めた。身体が軽くなってくる。

「さようなら・・・お父さんお母さん」

信号が青に変わった。

今日は麻衣子の七回忌だった。

「麻衣子のこと、忘れられないわ」

「忘れる必要はないんだよ。今でも麻衣子は僕たちの中に生きている」

「それは思い出よ。麻衣子は天使になって次の人生を迎えているのよ。きっと」

「そうだな。僕たちの手は離れているんだよな」

「でも、あの爪を噛む癖だけは直してあげたかったわ」

妻は視線を空に向けた。

車は麻衣子の眠っている寺へ向かっていた。





## 「チョコレートの味」

君島恒星

その彼女を一目見て、甘い予感が僕を包んだ。

新大阪までの新幹線。

退屈な出張の隣の席は、ナイスバディーの二十代の女性だった。

大きな荷物を重そうに網棚に持ち上げようとしていた。

「手伝いますよ」

僕はバックに手を伸ばした。

「すみません」

上目使いの大きな瞳、ハスキーな声、好みの女だった。

彼女は座席に座るとハンドバックからチョコレートを取り出して食べ始めた。カリカリとチョコレートが砕ける音が聞こえ、薫りが漂う。

「好きなんですか？」

彼女は視線を向けずにうなずいた。チョコレートを口に運ぶ動作は止めなかった。

よほど好きなのだろう。新幹線が東京駅を出発するときには2枚目のチョコを食べていた。

太らない体質なのか？

現在、いいプロポーションを保っているから、きっとそうなのだろう。

チョコの香りを漂わせながら彼女が言った。

「血液型は何型ですか？」

「O型です」

と速答した。彼女の目がキラリと光った感じがした。

「飲みますか？」

彼女はポットからココアを注いでくれた。

「遠慮なく」

僕は口をつけた。

「おいしいです」

「ありがとう」

沈黙。

彼女はチョコを頬張っている。僕は不安を感じて、雑誌に目を落とした。変わった女なのかもしれない。相手にしないほうがいいかもしれない。

「大阪までですか？」

こんどは彼女の方から言葉をかけた。

「仕事で・・・」

「そうなの。大変ですね。わたしチョコレートを食べるの高校卒業以来なんです」

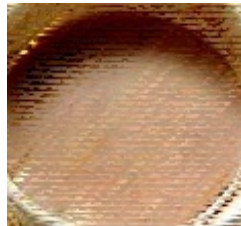
彼女が勝手に話し始めた。

「好きだったけどやめたの。太るからね。男に嫌われなくなかったから。あいつのために汚い仕事をして子供も産んだ。でも、あいつはどっかに消えちゃった。O型だったんだ、あいつ。両親に心配かけたくないのよ。男に捨てられて死ぬなんて惨めじゃない？ あなたは、わたしの不倫相手よ。遺書は用意してある。愛するために死ぬのよ、わたしたち。マスコミが騒げば本当の話になるわ」

彼女が僕にキスをした。チョコの味。

「子供？ 網棚のバックの中で眠っているわ。ふたりの旅立ちより一足先にあの世へ行ったのよ・・・わたしもココアを飲むわ。付き合ってくれてありがとう」

僕の瞳孔が開ききるまで彼女は喋っていた。





## 「家庭教師初日」

君島恒星

夕暮れの住宅街、美里は無表情でベランダから卵を投げていた。

僕の足元で卵が花開いた。

「何してるの？」

「見てわからない？ 卵を投げてるのよ」

美里の投げた最後の卵は、僕の額で炸裂した。痛みを押さえて、僕はそのまま玄関の呼鈴を鳴らした。

「こんにちは。鈴木ですけれども」

スリッパの音とともに、愛想のいい母親が顔を出した。

と同時に額の卵にびっくりした。

「どうなされたんですか？ 先生！」

今日から、ここの家の娘の家庭教師をすることになっている。

「いや、隕石が卵だったようで...タオル貸してもらえませんか？」

「どうぞ、洗面所を使ってください」

顔を洗っている時、美里がベランダから降りてきて僕を見ていた。

母親から娘の美里を紹介される。卵を投げていた時の無表情ではなく、笑顔で挨拶をしていた。

親の前ではいい子なのだろう。美里の部屋で、家庭教師の初日を迎えた。

「なんで、言い付けなかったの？」

「何でだと思う？ 3回チャンスをあげよう」

美里は無表情のまま首を傾けて考えこんでいた。

「家庭教師のアルバイトを失いたくないから？」

「違うな」

「ベランダのわたしに一目惚れしたから？」

「逆はあっても、それはない。ラストチャンスだぞ」

「当たったらいいことある？」

「そうだな。僕の初恋の話を教えて上げようかな。誰にも話したことない貴重な話だ」

美里は目を輝かせたように思えた。

「同じように卵を投げたことがあるからとか？」

「ピン、ポン！ たまげたな。当たっちゃったよ」

「約束よね」

僕は初恋の話を始めた。初日の勉強はどうでもよくなっていた。

僕の家庭教師は女子大生だった。勉強嫌いの僕は初日に卵を投げつけた。泣いて帰ると思ったけど、何も言わずに勉強を始めた。僕は美里のように、何で言い付けなかった？ とは聞けなかった。その疑問は、いつか恋心に変わり、勉強にも熱が入っていった。彼女は最後まで僕など相手にしてはくれなかったけど...

初日は自分の話で終わってしまった。

母親は言った。

「変わった子ですけど、よろしくお願いします」

娘が卵を投げていることは知っているようだ。

表に出てベランダを見上げると、目の前に卵が飛んできた。

「先生、またね！」

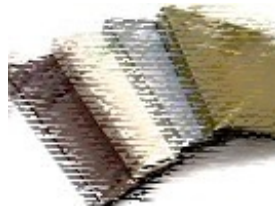
美里は笑顔を見せた。気に入られたかもしれない。

「コントロール悪いな。ハートはここだぞ！」

美里は爆笑していた。







## 「みなれた笑顔」

君島恒星

「わたしが帰ってくるまでに、出て行ってよね！」  
捨てぜりふを残して、美代子が部屋を飛び出して行った。同棲して一年ちょっと・・・夢のようなふたりの生活が急にしぼんでいった。  
それはきっと、美代子に新しい男でもできたからだろう。  
僕をかまわなくなったからだ。  
気がつけば、そのことで大喧嘩になっていた。男のことなど妄想だと美代子は涙で訴えていたが、不審な行動が僕を悩ませていた。  
僕は捨てられたのだろうか？  
自分の荷物を整理し始めた。ふたりで買ったものは美代子にあげようと思う。  
アルバムが出てきた。あまり写真は撮っていないけど、型としての思い出に違いない。写真を見ていると、不思議なことを発見した。  
美代子の顔が写っている写真がないのだ。  
すべての美代子の写真はおどけた顔をしているか、手で顔を隠しているものだった。まともに写っているものがなかった。  
そういえば、最近まともに美代子の顔を見たことがなかった。  
どんな顔だっただろう？  
情けないな・・・いつからだろうか？ 自問自答してみる。記憶の奥にそれはあった。  
「そろそろ結婚を考えない？ 両親も心配しているし、できたらお父さんに会ってほしいの」  
僕はまだ早いと笑ってごまかした。あの時からだった。  
逃げていたのは僕だったのか？  
美代子への不信感や男の疑惑は、結婚はまだ早いと思っている僕の妄想から生まれたものだったのか？  
美代子はふたりの同棲生活を、否定していたのかもしれない。いつか思い出しても、証拠の写真には写りたくないという心境だったのかもしれない。  
始めから？  
始めから美代子は真剣な付き合いだったのだ。僕は果たして、真剣だったのだろうか？  
いっしょに過ごした部屋を、ポーと眺めていた。

荷物の整理はやめ、美代子の実家に電話を入れた。何と、美代子の声が響いた。

「わたし、今日は休んだのよ」

待っていたのかもしれない。

「お父さんにお会いしたいんだけど、何時に帰るかな？」

「その前にすることがあるでしょう？」

「何？」

「わたしとの仲直りよ」

僕はスーツを着込んで出かけた。美代子は実家の前で迎えていてくれた。いつもの、みなれた笑顔で・・・





### 「読書好き」

君島恒星

僕たちのデートは、こうして始まる。

場所は彼女のマンション。

今日のデート道具は僕が用意する番だった。昨日、本屋で出版されたばかりの直木賞作家の本を2冊買った。

これならば、満足するだろう。

ページをめくりたい欲望を、一晩おさえて彼女のところへ急いだ。

「おはよう」

彼女の笑顔がそこにあった。彼女は、僕の買ってきた本を手にとって言った。

「やったー！ これ読んでみたかったのよ」

テーブルには紅茶のセットとクッキーが用意してあった。

「食事は？」

「朝食は食べたよ」

「そう、今10時だから、この本を読み終わってからの遅いお昼でいいかしら？」

「もちろん、望むところだよ」

彼女は紅茶を入れ始める。ふたりで並んでソファに座った。

「いい？」

「ああ」

ふたりそろって本の表紙をめくった。

僕の目は活字を追う。イメージが頭の中で映像になり刺激した。

導入部分に引き込まれる。片手を紅茶に伸ばし、口元まで持ってくると紅茶の香りが漂った。

彼女を覗いてみると、夢中で活字を追っている。

僕たちはいつも読書デートをする。

読書後は食事をしながら、本の感想を話し合ったりして、本を2度楽しむのだ。1時間半後に彼女は本を閉じた。それに遅れること5分後に僕も読み終えた。

彼女は本を投げ出して言った。

「最低！」

「最悪」

僕も呟いた。

実は、ここ9回の読書デートがこのような結果で終わっているのだ。つまり、選択した本がつまらないのだ。読んでも気持ち良くならないのだ。

「有名な作家だったのに…」

「そういうものに限って面白くないのよ！ まだわからないの？」

「この本、読みたかったって、さっき言ったじゃないか」

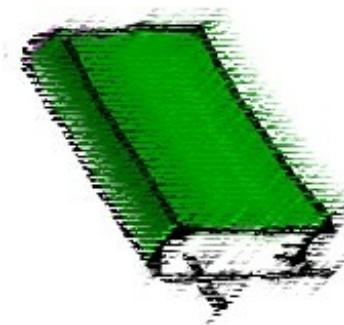
「新人を発掘しなくっちゃ！」

今回も本を選択した僕が悪いことになった。

でも次は彼女が本を選ぶ番だ。つまらなかつたら、ただじゃおかない。

何でふたりで本を選ばないかって？

だってふたりで選んだ本がつまらなかつたら、怒りのやり場がないじゃないですか。





### 「正当性」

君島恒星

右足はアクセルを深く踏み込んでいる。

視界に入るネオンは流れ星のように後方へと流れ去る。

「ちょっと、スピード出しすぎよ！」

助手席の女が叫んだ。女の瞳は恐怖に慄いてきた。

「怖ければ降りろよ」

僕は冷たく言った。

「停めてよ！ 停めて！」

乗ったおまえが悪いんだよ。スピードメーターは振り切っていた。

自動制御は突破らってある。壊れるまで走り続けるだろう。

ハンドルに手を伸ばそうとした女の頬を殴った。

「死たいのか！ ハンドルを数センチ動かしただけで横転するぞ！」

女はシートに身を丸め込んだ。しょんべんをちびるかもしれない。

夜の高速道路。

町で声をかけられただけで、知らない男の車に乗り込んでしまう女。自業自得だ。

僕はいつ死んでもいいのだから。

2ヵ月前に彼女とちょっとしたことで喧嘩した。彼女は僕の部屋から、深夜の街に飛び出していた。とたんに不安になった。探しに出たが、見つかるわけがない。彼女からの連絡はない。あったのは警察からだった。ナンパされて乗った車が事故を起こし、大破したそうさ。

死亡・・・

その言葉が理解できなかった。

見ず知らずの男の車に乗って死んでしまったのだ。

深夜、彼女がナンパされたあたりで、彼女に似た女を見つけ、声をかけた。彼女は小首をかしげて笑った。もちろん知り合いではない、見ず知らずの女。

「いい車ね。乗せて！」

勝手にドアに手をかけた。彼女に似た女に怒りを感じた。高速に入り女が恐がるまでスピードを

あげる。死んでもかまわないという気持ちが女を恐怖に導いていた。

あれから週に1回は女を乗せて同じことを繰り返している。恐がる女はまた元の場所で降ろしてやる。ただそれだけ・・・

その夜の女はさっきまで身をまるめていたのに、スーと座り直し僕を静かに見ている。恐がらないのだ。スピードをだしても、ずっと僕の横で僕の横顔を見つめていた。気持ちが悪くなってきた。女は激しい走行音の中、小さく声を出して言った。聞こえるはずのない声が頭のなかに刻まれる。

「楽しいの？」

彼女の声だった。

「おまえなのか？」

女はそれ以上話さなかった。

知っているさ。こんなことしたって何にもならないって・・・別におまえに会いたかったからでもない。ヤケでもない。ただ回数を重ねて、ナンパとそれにのる女の正当性を感じたかっただけだ。

僕はスピードを落とした。





## 「7時35分」

君島恒星

7時35分、バス停に並ぶ人の列の中に、今日も彼女はいた。今日、僕は両親や親戚から言われて入会した、体裁のいいお見合いパーティーに参加する。28歳という年齢が回りを色めき立たせるようだ。女性に興味がないわけじゃない。むしろ好きだ。でも何故か付き合っても、結婚のふた文字を意識することができなかった。

何故か？

僕は悩みながら、その答えを探し回った。そしてひとりの女性にたどりついたのだ。高校生の時から朝7時35分のバスに乗って駅まで行っていた。そのときから同じ列に並んでいた同じ年くらいの女性がいた。10年前から毎日姿を見ていたことになる。もちろん、話をしたこともない。なのに、いつのまにか意識していたのだ。

他の女性と自然に接するようになるには、彼女と別れなくては...話をしたこともない彼女と...

でも、どうやって？

その日の朝、僕は彼女の後ろ姿を見つめていた。彼女は振り向くと、列から離れて僕の前にやってきた。

なぜ？

僕は焦りながらも先に声を振り絞った。

「おはよう」

「おはようございます」

「なにか？」

「ごめんなさい。一方的に言わせてください。毎朝お会いしていましたよね？ いつのまにか意識してしまっていたの。何も知らないあなたを、自分のイメージで作り上げていたのよ。ごめんなさい。いつか声をかけてみようと思っていたのだけれど、イメージを壊すのが恐くて...」  
なんと彼女も僕と同じ気持ちだったのだ。僕は同調していいものか考えていたら、バスが来てしまった。彼女はお辞儀をすると、バスに乗り込んでいった。僕も続いたが話すきっかけは、それっきりなくなってしまっていた。でもこれで、彼女とは切れた。いや、彼女が切ってくれたのだ。

切なさを残しながら、見合い会場に行き名札を胸につけた。ビールを手にとり女性を見回した。その中に、僕を見ている女性がいた。



バス停の彼女だった。

「こんばんわ。お話いいですか？」

「ええ、もちろん。わたしこういうパーティー初めてなんです。あの、ごめんなさい。朝、一方的に失礼なことを言ってしまって...」

僕は唇に人差し指をあてた。

「僕もあなたと同じなんですよ」

「え！」

「明日も7時35分のバスに乗ってくれますか？」

「もちろんです」

彼女は笑みを浮かべた。





## 「小さくなあれ」

君

島恒星

夜道に女性がひとりで歩いていた。

僕は彼女を追って2メートルの位置まで近づくと、箱を開けて緑色の玉をとりだした。

不審に思った女性が振り向く。幼い瞳が興味をわかせた。

「僕の世界においで！」

そう呪文の言葉をかけると、緑色の玉は一瞬光り、見る見る間に彼女は10分の1に小さくなった。

恐怖に歪む彼女の顔。

いくら逃げようとしてもすぐに追い付く。僕はつぶさないように彼女に近づき、やさしく手で掴むと、カバンの中の虫かごに入れた。

「少しの辛抱だよ」

僕は自宅に向かった。

3ヶ月前、両親が親戚たちとの旅行中に交通事故で亡くなった。

残ったのは保険金と、親戚の財産だった。その中にその屋敷があった。古い洋館なのだが住心地がいい。迷わず僕はそこに住むことにした。生活費には困らない。

その洋館の地下室に金庫に入った謎の箱があった。その中には緑色の玉が入っていた。

世界創造の玉だという。

好きなものを、そのまま小さくできるのだという。

試しに野良猫に向かって玉をかざしながら

「僕の世界へおいで！」

と言ってみる。

猫はピンポン玉の大きさになった。

これは本物だった。

僕は小さな女を飼ってみようと思った。

最初、女は泣き続けていた。なかなか言うことをきかない。そのうち、態度はでかくなってくる。

「あなたにわたしは犯せないわ。だって小さいんだもん」

犯せなくても殺せる。僕は彼女を衝動的に殺してしまった。

「馬鹿だな。次を飼えばいいんだよ」

次の日ふたりの女性を小さくして連れてきた。女たちを覗いていたら急に屋敷の屋根が無くなった。

ポツカリ空いた空から、大きな顔が覗き込んだ。

「おお、こいつも女を飼い始めたぞ」

僕も小さかったのだ。

するとその上の屋根もなくなった。

もっと大きな瞳がこっちを見ている。

「大きな世界を造ったな」

そのとたん、その上の屋根もなくなった。その上も、またその上も...僕は米粒よりも小さな存在だったのだ。





## 「ダウンジャケット散った」

君

島恒星

ユッコは、赤いダウンジャケットを、埋もれるように羽織り

「暖かい！」

と言った。

と付き合い出して、初めて欲しかったものだ。この冬、ユッコは赤いダウンを自分の身体の一部のように、羽織り続けた。

アパートから多摩川が近いため、よく多摩川ベリで赤いダウンを見かけた。川の流れを一日中見ているのが好きな子だった。

「同じ流れなのに、同じ水ではないのよね。同じように見えて、中身はぜんぜん違う」  
よく、そんなわけのわからないことを言っていた。

デートの時も、多摩川で話をすることが多い。さすがに僕は、手持ち無沙汰になってしまい、釣竿を持っていったりした。そういうときにかぎって、釣りの料金を徴収されてしまう。ユッコは笑い転げていた。

フリーターの生活もそう長くは続かないだろうと、思い始めていた。

ユッコには危機感というものがない。多摩川のやさしい風のように、いつも自然体だ。

「結婚？ なんのために？」

いまは、僕になびいているだけなのだそうだ。

就職をして、ユッコとの未来を考え始めた時、ユッコは目を潤ませながら言った。

「変わったね。昔はもっと自由だったのに...同じ流れでいかなくちゃ」

ユッコといっしょにいるのだから、同じじゃないか？ 就職して安定するのが何で悪いんだ？

僕は変わってないだろう！

春先に、ユッコはアパートから姿を消した。あの赤いダウンだけを持って...

僕は探した。そこで、現実を知った。ユッコの詳しい事を何一つ知らない。友達...実家...親戚...  
何にも...

いなくなって一カ月後、ユッコから連絡が入った。

「逢いたい...」

多摩川の京王線の鉄橋が待ち合わせ場所だった。季節は春。少し動くと汗ばむ季節。多摩川ベリ

は賑わっていた。待ち合わせ時間に携帯が鳴る。

「見える？」

鉄橋の向うに、赤いダウンのユッコの姿が見えた。鉄橋を歩いてこようとしている。

「危ない！ 戻れ！」

「わたし、あなたのことが好きになっちゃったみたい。逢いたくてしょうがないのよ」

「会えるから。とにかく戻れよ！」

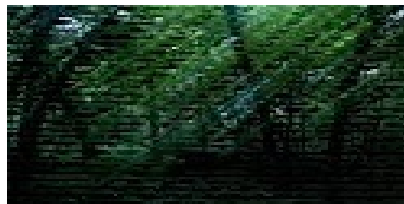
「逢いたくて逢いたくてしょうがない。でも、これって、わたしらしくないと思わない？ しばられるなんて...」

電車が鉄橋に滑り込む。汽笛と急ブレーキの金属音。多摩川べりのサラウンドな悲鳴。

数秒後、赤いダウンジャケットが散った。一瞬、羽毛が多摩川に大きな花を咲かせた。

それは僕にとって、永遠の花になった。





### 「夜のリフレイン」

君島

恒星

ポツポツと雨が落ちてきた。

紺のセーラー服に黒い染みが増えていく。

「よかった。あの日に似てる...」

暗闇の奥からヘッドライトが、向かってきた。頃合いをみて、自転車のペダルに力を入れる。

ヘッドライトにわたしの姿。

一瞬の大きな影。

最後のスポットライトの中で、わたしは叫ぶ。

でも、急ブレーキの悲鳴で、かき消されてしまった。

ワンボックスカーの運転席の男は顔を歪ませている。わたしは自転車とともに空中へ放り出され、アスファルトの上に叩き付けられる。頭をしこたま打った。頭痛を乗り越えた激痛が頭蓋骨の中で暴れている。

雨は激しくなってきた。

スカートがめくれている。

男が車から降りてきて、悲痛な顔でわたしを見下している。

「早く！ 動けないのよ。スカートに戻して」

それは音にならなかった。

男は周りを見回す。車も通らない田舎道。

この時間じゃ無理もないわ。アルバイト先の先輩が風邪をひいたので、遅番をやったのが運のつき。男はやっとわたしを抱き上げて車の後部座席に押し込んだ。

「ああ、暖かい」

親切にも、自転車まで車に積んでくれた。

急発進。

気がつくと、車は砂利をけていた。砂利道は山の方向。

病院は反対じゃないの？ それとも近道？

崖の前で車は止まった。

男の血走った目。自転車を降ろし崖の下に投げた。

それって...

車はなおも山奥に向かう。車が止まりエンジンが止んだ。雨が車体を打つ音だけが聞こえる。男は車に積んであったスコップで、取り憑かれたように穴を掘り始めた。

数時間後、息を切らせながら男は、わたしを抱き上げると穴の中に突き落とした。穴には雨が溜まっていた。池に落とされた感じ。湿った土...いや...泥が、全身にかけられる。男は作業が終わると、力つきたように四つん這いになった。

わたしは土の中から両手を伸ばし、男の頭をつかむ。男は悲鳴をあげた。わたしは力任せに男の顔を土の中に引きずり込んだ。わたしには人間以上の力が存在していた。引きずり込んだ男は両手両足をばたつかせ、顔は恐怖で歪んでいた。

数分後、男も動かなくなった。わたしは土の中から起きあがる。男も顔をあげた。

「もうやめよう」

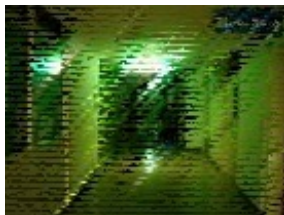
男が言った。

「毎晩続けなくちゃ。意味ないよ。あなたがしたことなのよ」

男は黙る。

さあ、また明日の夜のために準備をしましょう。そのうち誰かが気づいてくれるわ。あの事故のことも、わたしたちのこの死体も...





### 「親の身勝手」

君島

恒星

深夜。

僕は大学病院の3階フロアーにある、産婦人科の待ち合い室で身を丸めていた。

急に、ゆっくり漂っていた空気が波立つように乱れた。

孫でも産まれるのだろうか？ 心配そうな顔つきの品の良さそうなおばさんが、目を輝かしながら入ってきたかと思うと、僕を見つけ、声を弾ませながら勝手に話し始めた。

「ご出産ですか？ わたしは初孫なんですよ。最近の嫁は身体が弱くてだらしもないけど、孫だけは産んでもらわないとね。今は超音波とかでわかるそうで...うちの孫は男の子ですって、小さいのが付いていたって...時代は変わるものですよ。昔は産婆さんが...」

僕はただ適当に、相槌をうっていた。

看護婦が緊張した顔で僕を呼びにきた。

ついにその時がきた。

椅子から立ち上がった時には、頭の中は真っ白になっていた。今、自分が何をすればいいのかわからないまま、看護婦に言われたとおりに赤い液体石鹼で手を洗い、白衣を着て集中治療室へと向かった。

生まれてくる娘に、重度の障害があることは事前にわかっていた。それこそ医学が進歩したおかげだ。でもそれがわかってからは、不安な未来のことばかり考えてしまい、妻と落ち込み続けていた。無事に生まれてきても普通の子のように、生活できないと言われていた。実際に娘をおなかに抱えている妻は、僕なんかよりも辛かっただろう。医者は母胎を守るために、帝王切開をして娘を取り出した。娘の身体には無数のビニールチューブが刺さり、巻き付いている。

医者に助からないことを告げられる。

助かっても普通の子供のように生活はできない。僕らの生活も巻き込まれてしまう。

身勝手な親の考え...

娘は僕の目の前で、目を開けることなく、口をパクパクしながら息を引き取った。産まれて数時間の出来事だった。

婦長さんが、新しいタオルにくるんだ娘の亡骸を抱かせてくれた。

「何もできなくてごめんね！」



そう言うのが精一杯だった。

待合室に戻ると、まだ話し足りないおばさんがいた。

「男の子でした？ 女の子？ うち、私似の男の子でしたよ。名前をね...」

状況をまったく考えないおばさんだ。僕は答えるかわりに涙を流した。

説明する気にもなれず、無視してソファに座ると、また涙があふれてきた。

今日、娘が誕生して、娘が亡くなった。

僕はこう思うことにした。

娘は僕たちの生活を守るために身を引いてくれたのだと...

やはり、親の身勝手にしかないか...





## 「吸血の時」

君島

恒星

ヘッドライトが暗闇の中で減速した。

派手な服装の地味な男...

「ヒッチハイク？」

腐った視線で、わたしを舐めるように見上げる。

「東京まで...」

「乗りな。東京までは行けないけどよ」

車は急発進。

男はわたしのミニスカートから伸びている足をチラチラ見ながら、質問攻めにする。

ラジオから緊張したアナウンサーの声が聞こえた。

「上水旅館の従業員が亡くなっているのが発見されました。その死体には血液がほとんど残って  
いなかったということです」

「この近くに吸血鬼かよ？」

吸血鬼が犯人のような言い方に、男は笑っていた。

馬鹿男！ 今の自分の立場を知れ。

車は乱暴に脇道に入り止まる。

肩を抱かれそうになったとき、わたしから首筋に歯を立ててキスをした。でも...

「マズイ！」

アルコールと薬漬けの血だ。思わず車内に嘔吐。リズムカルに噴き出す血...痙攣している男。

車から降りると目の前に、ひとりの男が立っていた。

「残念だな。いい所が見れると思ったのに」

「見てたのね」

口についた血を手首で拭った。

「こいつは見ただけでマズイってわかるだろう？」

「恐くないの？」

「僕の彼女もバンパイヤだったんだ」

男は話し始めた。

「この近くの屋敷に住んでいた彼女に、恋をしたのは学生の時だった。彼女も僕のことを愛してくれた。でも、どうしても埋められない溝があった。彼女がバンパイヤだということ。彼女の面倒をみていたのは、昔からその屋敷につかえる貞雄さんという人だった。僕は貞雄さんから、新鮮な血液の採取方を教えてもらい、貞雄さんが亡くなった後も、彼女のために血液を採取し続けていた。その彼女も死んだ。バンパイヤは死なないというのは嘘だ。彼女は僕に人殺しをさせないように、自ら死を選んだ。僕が悲しむというのも忘れて...」

「すごい、作り話ね」

「作り話なんかじゃない。バンパイヤは今の世の中、目立ってはいけないんだ。特異体質の人間なのだから」

「わたし、いつもひとりだった...親にも理解してもらえなかった。そんなわたしをあなたが理解してくれるとでもいうの？」

「僕にはあなたと生活できる知識がある。それに、一目見て好きになった」

「だったら、わたしを夢中にさせてくれる？」

「お腹はすいてないかい？ 新鮮な血液があるんだ」

「旅館の人を殺したのはあなたね」

「血液を最後まで採取するには技術がいるんだよ」

「連れてって！」

彼はわたしの手をとって森の中を歩きだした。





## 「再会」

君島

恒星

渋谷の雑居ビル群。

最終電車の時間から、ずいぶんたっているのに、駅への人の流れは無くなっていた。

目立たない3階にあるカウンターだけのスナック。客は6人で満席になってしまうだろう。今の僕にはここがお似合いだ。

静かに酔いたかった。

初めての店内。客は誰もいない。狭いながらも店内の空気が心地よさを感じさせる。カウンターの中からママが立ち上がった。不思議そうに見つめる瞳から笑みがこぼれた。

「あら、孝ちゃん！」

「真由？」

中学の同級生との再会だった。

真由とは中学2年の夏休みに二人で家出をした。戻った時、親に怒られ、真由と会うのを禁じられた。その後、真由は一家で引っ越してしまい、完全に連絡がとれなくなってしまった。

それ以来だった。

「落ち込んでるの？」

「何でそんなこと聞くかな？ 普通もっと懐かしがるとかしない？」

「ひとりでこんな店に来るなんて、普通じゃないわよ。常連でもないのに」

「常連になればいいんだろう」

「風邪をひいてるようね。心が...重傷だわ」

中学2年の夏休み、ふたりで松本発新宿行きの「あずさ」に飛び乗った。真由が歌舞伎町に行きたいと言い出したからだ。貯金していたお年玉をおろした。全部僕のお金。僕と真由の関係はというと、ただ席が隣だったというだけ...

真由は歌舞伎町で人を探し始めた。3日間、ふたりでホテルに泊まりながら...

探していたのが、本当のお父さんだと知ったのは、帰りの電車だった。僕は真由の言いなりになって付いて回っていただけだった。もちろん、ホテルに入っても何もしていない。真由は強い存

在だった。お金を使い果たして帰ろうと言ったが、真由はお金を稼ぐからもう少し付き合っ  
てと言った。僕は初めて女を殴った。真由に対して強くでれたのは、その時だけだった。

「あれからどうしてた？」

「いまこうして、カウンターに入ってる」

変わってないようだ。

「それより、孝ちゃんの風邪のぐあいは？」

僕は、会社を辞めて独立したがうまくいかずに倒産。離婚して借金との生活だ。

「お店、もうすぐ閉めるから。朝になったらいっしょに行こうよ...もちろんお金はわたしが持  
つわ。あの時のお返しよ」

「どこへ？」

「孝ちゃんの無くしたものを探しに...わたしが付き合っ  
てあげるのよ。ありがたく思いなさい」

真由の笑顔は、あの時のままだった。

まばゆい朝日を浴びながら、僕は真由に手を引かれて、松本行きの「あずさ」に乗り込んだ。





## 「クリスタルアート」

君島

恒星

その少女を見たとき、衝撃が走った。

いずれ、自分のコレクションになる。そんな予感のある少女だった。

僕には子供の頃からの趣味がある。

一種のコレクションだ。

それは昆虫から始まったクリスタルアートだった。エポキシ樹脂でその昆虫のもつ姿を、永遠に封じ込めてしまうものだ。カブト虫を飼っていても、ひと夏で死んでしまう。ならば、透明なエポキシ樹脂で包んで、保存しようとしたのが始まりだった。コレクションは次第に増えていき、社会人になってからは、制作部屋が確保できるマンションに住むようになった。毒を持つマムシやコブラもコレクションになっている。だんだんとエスカレートして、大きな物がコレクションになっていった。そして、どうしても手に入れたいものが、人間だった。

どうせならば、幼さが残る少女がいい。

これは僕の願望だった。

そして、思い描いていた偶像が、突然目の前に現れたわけだ。

僕は興奮した。少女を調べ、チャンスを待った。

彼女の両親は交通事故で亡くなっていた。今は親戚の家にいる高校一年生だ。材料のエポキシ樹脂は十分に確保した。しかし、実行しようとした大切な日に、彼女は怪我をした。体育の授業でリレーをしている時、転倒して膝を痛めてしまったのだ。

妥協はできない。傷が治るまで待つことにした。

その後、彼女を尾行していると、彼女はぐるりと振り向いて僕を見て言った。

「わたしのことつけていたでしょう？」

「いや、足の傷が心配で…」

「なんで、知ってるの？」

不覚にも彼女に気づかれてしまった。

「わたしに興味があるの？」

彼女は戸惑う僕を逆に脅して、無理やり部屋に上がり込み、コレクションも見られてしまった。この時、不思議だけど誘拐する気などなくなっていた。逆に、好奇心たっぷりの瞳で見つめる彼女をいとおしく思った。

「変な趣味。まさか、わたしをクリスタルに閉じ込めようとしたわけじゃないわよね」

その時から、彼女は僕をリードし続けている。

数年後、彼女の親戚とも話がつき、円満な結婚をすることができた。結婚後は趣味でクリスタル製の家具や置物をいっしょに作っている。彼女はクリスタル技術を習得していった。

子供も生まれた。

人間は変わっていく。

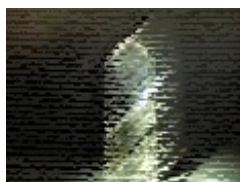
僕も彼女もどんどん変わっていく。

今、僕はクリスタルの中にいる。

彼女と見知らぬ男との情事を見ていたりする。

娘が僕を指さして言った。

「あれは、前のパパなのよ！」





### 「時間のない丘」

君島

恒星

その八ヶ岳の丘を「時間のない丘」と呼んでいた。

あの時、有紀子は学校の事を思い出しては泣いていた。僕達はひと夏、その場所で過ごした。僕は、有紀子の話を思いっきり聞いた。そして「大丈夫だよ。何もかも上手くいく」と言うのが精一杯だった。

大人になった今「時間のない丘」が懐かしく思い出され、行ってみたくなった。懐かしいというのは嘘になる。会社をリストラされ、離婚した。前が見えない...あの丘に行けば元気が出るかもしれないと思ったのだ。

僕が中学生の時に、空前の別荘ブームがおとづれた。父はその波にのまれて、八ヶ岳に小さな別荘を手に入れた。最初のころは毎週末行っていたが、交通費も馬鹿にならないので自然と足も遠のいていった。

僕はひとりで中学2年の夏休みを別荘で過ごしていた。毎日必ず近くの丘に行った。大きな木の下で、遠くの風景をボーと見ているのが好きだった。

その日、その丘に行くと、少女が僕の場所に座っていた。少女は僕を見つけても悲しそうな顔を崩さなかった。しかたなく、僕は彼女の横に座り風景を眺めていた。あの時、僕たちの時間は止まっていた。

彼女が初めて口を開いたのは、3日目だった。風に飛んだ彼女の麦藁帽子を拾った時、彼女は言った。

「ここにいると、何もかも忘れられるのよ...」

名前は有紀子といい、同じ中学2年生。学校でいじめにあっているという。

「大丈夫だよ。何もかも上手くいく」

そう言うしかなかった。

僕達は夏の間中、毎日景色を見て過ごした。

15年後の懐かしい丘が目の前にあった。大きな木もそのままだ。あの時の有紀子の場所に座っ



て景色を眺める。

えっ幻覚？ 麦藁帽子の有紀子が視線に入った。

「そこは、わたしの場所よ！」

中学生じゃない、小学生の有紀子がそこにいた。

びっくりしている僕に躊躇せず、有紀子は言った。

「どいてってば！」

僕は場所を譲った。

「ママ！ ママの場所を取り戻したわよ」

本物の有紀子がそこにいた。

「お久しぶりです」

「こちらこそ...」

15年前の場所にふたりで座った。

「何だか急に15年過ぎたみたいだ」

「そんなことないわ？ いろいろなことがあったでしょう？」

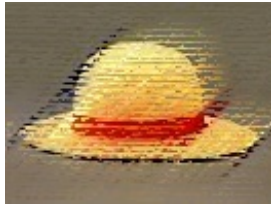
僕は再会と偶然に心が一杯だった。

自然と、現在の自分の全てを有紀子に話すことができた。

有紀子は景色を見つめながら僕に言った。

「大丈夫よ。何もかも上手くいくわ」

有紀子の笑顔は、見たこともない懐かしさで満たされていた。





## 「秘境の巫女」

君

島恒星

彼から突然の、帰郷するという電話。

この村から出て行ったら、二度と逢えない。そんな予感が全身を襲った。

神社の巫女の衣装を脱いで、彼の泊まっていた旅館に急いで行ったが、出発した後だった。彼の車は山を迂回する道を走るはず。わたしは道具を握りしめ、山道を走って降りた。

ひと夏の思い出を胸に抱きながら...

夏の初めに、彼はやってきた。

この村には小さな「根治の湯」という温泉がある。その温泉の効用が週刊誌で騒がれてからというもの、有名になった。ストレスからの解放の効果がある。今日も週刊誌の取材があった。週刊誌が狙っていたのは温泉だけでなく、行方不明者がでるので、秘境「根治の湯」と失踪がテーマだと聞いていた。「根治の湯」の湯元に消えていった旅行客というわけだ。その失踪者の生命の源が温泉の効用になっているなどと、在りもしないことを書く週刊誌もあった。

この村には、年寄りしかいない。若いのは、わたしくらいなものだ。村を出た同級生たちに、早くこんな村から出ると言われるが、わたしは出たくはない。だって、村に祭られている神社の巫女なのだもの...

山の斜面を転がるように走って下りた。

山を横断して、通り道で待つ。

車がゆっくりと走ってきた。彼はわたしを見つけて、驚いた顔をした。

「どうしたの？ そんなに汗をかいて...」

「行くの？」

「ああ、取材とバカンスは終わりだ」

バカンス？ わたしはバカンス？

車から身を出した彼の前に立ち、彼めがけて握りしめていた小太刀を振り降ろす。首筋にサクッと入り込んだ。血が噴き出す。

彼の取材テーマは、「秘境にある二度と戻れない村」...そう、それはここよ。

いままで何人の人を殺したか。

好きになった男もいた。

嫉妬した女もいた。

すぐに好きになるのはわたしの癖？

大丈夫、今回も村の老人たちが、全部片付けてくれるはずよ。

どこからともなく、近所の老人たちが集まってきた。

「また、派手にやって...でも、安心しろ、証拠は残さんからな」

老人たちは、年に似合わないキビキビした動きで、死体を片付けてしまった。

「あんたは、自由にしてる。なんせ、この村の巫女なんだから」

「秘境の湯と美人巫女」という記事が載った週刊誌が、書店を飾ったのはそれから少したってからだった。

新しい観光客が、やってくる。

村の老人たちは、観光地になると喜んでいた。

新しい男ができるかしら...わたしは舌なめずりをした。





## 「15年目の殺人者」

君島

恒星

15年が過ぎた。  
工藤亜由美はアイドル歌手絶頂期、この崖から海に舞った。

自殺。  
その時、この崖には溢れそうになるほどファンが群がった。ガードマンも配置され、後追い自殺をしないように目を光らせていたが、その合間を縫って、二人の若者が崖から飛び降りた。  
あの喧騒は、今はない。

静かなものだ。  
13回忌が終わると、マスコミも取り上げようとはしなくなり、自然と人は集まらなくなった。  
忘れ去られてきている。

今年の命日は、僕といつもの女性だけだった。  
その女性は、15年間亜由美の命日には必ずきていたのだろう。いつも目が合うので、自然と意識していた。

崖から海を見渡す。  
遠くで波しぶきが踊っている。  
変わらない風景。

「静かになりましたね」  
彼女から話しかけてきた。初めてだった。  
「本当に静かですね。ここに来るのも、ふたりっきりになっちゃいましたね。もう、亜由美のことは忘れられてるのかな？」

「世間ではそうでしょう」  
お互い15年間、ここで会っていたけど言葉も交わしたことがなかった。自己紹介をし、彼女の名前が琴美だということを知った。

「15年も思い続けるって、大変なことだと思ってたけど、わたし、続けられているんです」  
熱烈なファンらしい。琴美は亜由美の自殺の時から、この崖に通い詰めていた。僕はそんな琴美に弱音をはいた。

「この頃思うんだ。そろそろ卒業しようかなって...僕もいい年になってしまったし...」  
琴美は海を見つめていた。泣いているようだった。

「琴美さんは、亜由美のどんなところに引かれたんですか？」

「わたし、亜由美さんって、あまり知らないんです...」

「え...でも？ さっき、15年間思い続けてるって...」

「わたしは、当時騒がれていた、この崖を見にきただけなの...ただの、やじ馬...」

琴美は僕を見ながら話を続けた。

「この崖で、あなたを見かけたの...悲しそうな顔をしていた。泣いていた。わたし、あなたを見るために毎日...そして、毎年、命日に来ていたの。わたし、あなたのことが一目で好きになってしまったの。でも、亜由美さんのことを忘れていないあなたを感じていたの...」

びっくりしていた。考えてもいなかったことだ。琴美は話を続けた。

「今年、ようやく話しかけることができたわ...あなたの目に悲しみが薄れていたから...」

「そんなことわかるんだ...」

「15年も見て来たのよ...わたし...」

さようなら、亜由美。心の中でそう思った。





## 「キュートな殺人者」

君島

恒星

「信ちゃん...助けて...お願い...助けて...」

晶子から哀願の電話がかかってきた。車をとばして八ヶ岳の別荘まで急ぐ。

「彼を、彼を、刺したの...」

部屋は血みどろだろう。

八ヶ岳の砂利を蹴る。タイヤが痛みそうだ。

別荘に入ると、数時間前から時間が止まっていたかのような光景が、網膜を刺激した。

「晶子、大丈夫か？ 怪我は？」

「信ちゃん！」

血みどろの部屋の中で晶子を抱き締めた。晶子の手には彼を刺した牛刀がまだ握られていた。血は乾きはじめている。

「彼が嘘をついていたの...それが我慢できなくて...文句を言ったら、怒鳴って...怖かったから、わたし...」

「いいよ、話は後で。落ち着いて、熱いシャワーを浴びて少し寝なさい。後は僕が片付けておくから」

「いつもありがとう...」

「さあ、その牛刀を離して...」

こわばった指を、はがすように一本一本伸ばして牛刀を台所に戻す。

男の死体はロープで縛り付け、重りをつけて、近くの湖に沈める。ゴムボートも用意してある。いつものことだ。

死体は、今夜のうちに処理した方がよさそうだ。月も出ていない。

なれていても重労働だ。ナイロンの網に死体と鉄の重りを入れてロープで結ぶ。ナイロンの網にしたのは、死体を魚が処理してくれるように考えた末だった。ゴムボートに乗せるのが一仕事、あとは湖の中心でズリ降ろすだけ。死体は浮かんでこない。

帰りにコンビニで、明日の朝食の材料を購入した。

湖から戻り、部屋の中は大まかに拭いて、細かいところは明日にしようと思った。どうせ晶子は

2～3日ベットの中にいる。

シャワーを浴びて、晶子の部屋に行くと、案の定丸まって震えていた。

「終わったよ」

「寂しかったわ...」

飛び跳ねるように抱きついてきた。晶子は寂しがり屋...男がいつもそばにいないと我慢できない。

「抱いて！」

晶子は男を殺した夜、人間とは思えない狂い方をする。

快楽をむさぼる晶子...

その晩は、一睡もできなかった。

朝食の用意をして、部屋を綺麗に磨き上げる。何人の男たちの血が染みついているのだろうか？

もう思い出せない。

熟睡している晶子が目を覚ますと食事をむさぼり、再び僕の身体もむさぼった。この快楽に僕は身を落としたのだ。

晶子はベッドを出ると新しい男を見つけて遊び回るだろう。

僕は、嫉妬しながらも彼が殺されるのを待ち続ける。

最後には僕の所に戻ってくる。

晶子の全てを知っているのは、唯一僕だけなのだから...







## 「ふたりの笑顔」

君島

恒星

「カシャカシャうるせえんだよ！」

電車内に男の怒鳴り声が響き渡った。

ヘッドフォンから漏れる音のことで、中年の男と髪の毛が立った学生らしき男とトラブルっていた。

僕は2メートルくらい離れてつり革につかまっていた。

一方的に学生が怒鳴られていたが、ヘッドフォンの音量を考えると、聞こえているかどうか怪しいものだ。怒鳴っていた中年男は、反応が鈍い学生に嫌気がさしたのか、胸倉をつかんだ。同時にヘッドフォンが外れる。

「何すんだよ！」

初めて学生の口から言葉が発せられた。でも中年男の手で締め付けられる。学生は何も出来ないでいた。

「人がうるさくて迷惑しているんだよ！」

中年男の方は勢いがある。そこに、割って入ってきた男がいた。さっきから二人を見ていたスーツ姿の中年だった。

「嫌がってるじゃないか。それに、あんたの方がうるさくて迷惑だよ」

「上等じゃねえか。次で降りろよ」

「あんたに言われて降りる必要はない」

「なんだと！」

中年男は自分の心ところに手を突っ込んだ。

ドスでも出しそうな雰囲気。

スーツ男は、その手を左手で押さえた。

「わかった。降りて話をしよう。みんなの迷惑になる。おい、君も降りなさい」と学生に言う。

学生は関係ない顔を装いながら言った。

「めんどくせえよ」

精一杯の抵抗か、本心は怯えている感じだ。

「誰のためだと思っているんだよ」

と言いながらも、スーツ男はあきらめたようだ。そして中年男に言う。

「次の駅で降りるから、静かにしとけ。物騒なもんから手を離せよ」

車内は騒然となった。

張本人の学生でさえ、落ちたヘッドフォンを拾うきっかけをつかめないでいるようだった。

僕はその後を見たくなかった。学生のその後も興味があるが、ふたりの中年男の方が興味深かった。

僕は次の駅で降り、男たちの後をつけた。決して血を見たいわけではない。

単純な好奇心。

ホームに降りたふたりを、電車内の全員の視線が追った。

男たちは改札を出ると、駅前の居酒屋に入った。即座に和解したのだろうか？ 僕は彼らに続

いた。すると、男たちはビールで乾杯し始めた。やはりスピード和解だ。彼らの後ろのカウンターで聞き耳をたてる。

「今日の学生は威勢はよかったんだけど、あっけなかったな」

「最近の若者って感じだ。カッコばかり一人前で、芯がない」

「普通、あそこまで言われたら降りるぞ」

「そう思わないかい、あんた！」

ふたりは僕を笑顔で見つめた。





## 「今だけを...」

君島

恒星

何で、その場から逃げたのか？

一晩考えて、自首しようと思った。

警察に向かう、信号待ちの車の中から外を見ていた。

似合わない鞆を持った女が走っていた。僕の車を見ると、ドアを開けて助手席に身を滑り込ませた。鞆が少しひっかかる。

「車を出して！　お願い！」

ヤクザ風の男が後を追いかけてくる。信号は青。僕はアクセルを踏んでいた。

「とにかく走って！」

首都高に入り、真っ直ぐに中央高速に入った。

女は息を切らしていたが、落ち着くと

「ありがとう」

と言った。

彼女の横顔に、甘酸っぱい感覚を覚えた。

「紀ちゃん？」

彼女は僕の顔をしみじみと見ると、その大きな瞳をさらに大きく見開いて言った。

「良くんなの？」

小学校の同級生の紀子だった。僕の初恋の子でもある。

「誰に追われてるんだ？」

紀子は鞆の中身を確認していた。

「もう東京にはもどれないわ。ねえ、良くん、時間ある？」

時間？

昨夜、新宿の飲み屋で喧嘩に巻き込まれ、男が3階の踊り場から落ちた。ニュースでは男は死亡したそうだ。僕は逃げた。

「人が死んだの？　でも、それって事故よね。自首は、わたしを安全な所まで連れてってからにしてくれない？　良くんは初恋の人なのよ」

さすがに僕もだよとは言えなかった。

紀子は鞆の中身を見せてくれた。札束が詰まっていた。

「3千万くらいはあるわね。この鞆、どうしたか知りたい？」

悪戯っぽい目が僕を見つめた。

紀子は、アルバイトでホステスをしていた。常連のヤクザっぽい不動産屋の男は、大きな裏取引の前に必ず紀子を抱いていた。彼がシャワーを浴びている時に取引用の金の入った鞆をいただいた。

「日常と自分が嫌になっていたのよ。でもこれで、自分を取り戻せたかも…」

「奴は追いかけてくるぞ」

「ものは相談なんだけど…」

「嫌な予感がする」

「いっしょに逃げようよ。お金はあるわ」

「でも、未来はない。未来のために自首しようと思ってたのに…」

「気持ちは傾いてきたってこと？」

「んなわけないだろう」

「まずは九州へ行きましょう」

「何故九州？」

「寒いから、暖かい所がいいでしょう」

「それより、国外逃亡といかないか？ バリあたりだと一生遊んで暮らせる」

「遊ぶ所あるの？ 海だけじゃない」

「もっと前に会いたかったな」

「未来のために？」

「そう、普通に…」

「でも、今だけを大切に作る生活もいいかもしれないわ」

「今だけをか…」

僕は、アクセルを少し踏み込んだ。





## 「朝日の中に」

君島

恒星

冬の朝。

まだ、日は昇っていない。

指の動きがぎこちなくなる寒さの中、三脚を伸ばして一眼レフカメラをセットする。

都会の一角のビルの陰。この季節の一番のポイントだ。

そして、もうここからの写真は二度と撮ることができなくなる。

ファインダーを覗いていると、人影が横切った。

「金森さん？ 写真ですか？」

彼女は、愛想よく笑顔を見せた。

背筋がゾクッとした。

会社の中でもずば抜けての美人だった。でも、彼女がここにいるわけがない。

「魔物でも見たような顔をしていますよ」

「そんなこと言われても……」

「今日で最後ですものね。最後のシャッターチャンスですよ。なのに、わたしはどうすればいいんでしょうか？ わからないの……」

彼女は寂しそうにうつむいた。

「何のことだか……」

「わたし、あの時、はっきり言えなかったけど、部長との関係が原因だったんです」

「あの後、噂は広まったよ。そして、部長は膵臓癌で亡くなった」

「取り憑いてやったのよ。卑怯な奴……逃げたのよ。でも、あいつはここにはいない……わたしはいつまで、ここにいればいいの？」

少し気持ちが落ち着いてきた。彼女はまだ成仏できていない。まだ、この世をさ迷っているようだ。

「あの時、僕は落ち込んだよ。有能な部下を亡くしたんだから……定年になってからも、忘れたことなどなかった」

「有能な部下？ それだけ？」

「好きだった。でも、立場上、行動に出られるわけがない。それこそ、不倫になってしまう」  
「正直な人。それ、聞いたかった言葉だったのかも？ 何かすっきりした。今だから、落ち着いて聞けるけど。あの時は、聞く耳なかったと思うし……」

「そうだろうな。あの時、君は部長への憎しみばかりだった。でも、今日会えて僕はホッとしたよ」

「わたしも、気が楽になった。だって最後の朝ですものね。そろそろ時間！ 話が出来てよかったわ」

彼女は笑顔を残しながら、薄暗いビルの蔭に消えていった。

ファインダーを覗き、元の会社のビルから昇る朝日を狙う。

元の会社のビルは、今日から解体作業が始まる。40年勤めていた場所が無くなってしまふのだ

。

朝日がのぞいた。ビルから昇る朝日はきらびやかだった。

シャッターを切る。何回も。

ファインダーに感じた……切ない影を。

デジタル画面の再生で確かめてみると、彼女が朝日の中、屋上から飛び降りている姿が鮮明に写っていた。

何枚も。

たぶん、最後のダイブ……





## 「お姉ちゃん消えた」

君島

恒星

「お姉ちゃん！どこ？」

僕が小学四年生の時、姉が公園で消えた。

ふたりで遊んでいたのに、急に姉の気配がなくなった。

夕方の太陽は厚い雲に覆われて、あたりは薄暗くなっていった。

ひとりぼっちの僕は、不安と戦い、泣きながら姉を探し回ったのを覚えている。

二十年ぶりに見る、その公園は、昔のままの雰囲気だった。子供たちの遊ぶ姿が眩しかった。

ブランコが風に揺れた……

いや、違う。

姉が小学生の姿のまま、ブランコを揺らしていた。

ブランコから飛び降りると、走りながら言った。

「こっちよ！」

僕は子供に戻ったように、無我夢中で姉を追いかけた。自然公園なので、噴水の向こうは、林になっている。そこで姉を見失った。

幻だったのかと思っていたら、姉の声が上から聞こえた。

「まだまだね」

姉は木の上にいる。

いつの間にか、公園には誰もいなくなっていた。あの日のように……

「わたし、良かったと思ってる。恨んでなんかいない」

姉は、木から降りて僕の顔を見上げながら言った。

「何の事？ わからないよ」

姉は笑った。

「そりゃそうだ。大人なんだからね。ゴメン」

ますます、わからない。

「あの時、公園の木の新芽を折っちゃったのよ。そしたら、黒いコートのおじさんが現れて、聞かれたの……覚えてる？」

「全然……」



「この新芽はもう戻せない。君の大切なものを置いていきなさいって！ 言われた」

僕はあの時、大切なものなど持っていなかった。

「わたしが、わたしじゃ駄目ですか？ って聞いたのよ。そしたら、おじさん頷いた。だから、ここでさまよっているのよ」

閉じ込められた記憶が湧き出してきた。僕は姉を犠牲にしたのだ。

「あなたが、悩まなくていいのよ。わたしが決めた事だから……あの時悩んでた。あなたはパパとママの本当の子供だけど、わたしは子供ができなかった時に養女としてあの家に行ったのよ」

「そんな事、知らなかったよ」

「あなただって、わたしの事嫌いだったでしょう」

確かに、両親は姉ばかりを可愛がっていたので、いつも嫉妬していた。

でも、本当の子供でない姉に対する、精一杯の愛情表現だったのかもしれない。

「不器用な親だったんだね」

姉は優しく笑った。

「そんな事ないよ。優しい親だよ」

風が吹いた。

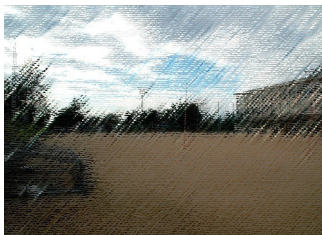
姉もマイナスの空気も一掃したような気がした。

公園らしい雰囲気が戻ってきた。

ここに来て良かったと思う。

昨日、両親が交通事故で亡くなった。





## 「理想の面影」

君島

恒星

駅の改札で彼女を見た時、思わずハッとした。

理想の女性だった……

今までに好きになった人の面影を感じたのかもしれない。

予定もないので、彼女の後をつけることにした。つけて、何をするというものもない。追って、その女性がどういう人なのか？ 何を考えているのか？ などを想像するのが好きなのだ。

彼女は駅から少し歩いた所にある、小学校の校庭に立ち寄った。僕の母校である。

同じ卒業生？

彼女の横顔に、初恋を抱いた、小学三年生の頃を思い出した。

好きなのに、その子には辛くあたっていた。いや、好きだったからなのだろう。

彼女は校庭を見渡した後、近くの中学校に向かった。

ここも、僕の母校……

彼女は何者なのだろう？

興味が沸き始めた。

彼女は、中学の時に好きだった子にも似ていた。

どうしても写真が欲しくて、友達に撮ってもらったことがあった。今でも、アルバムのどこかに貼ってあるだろう。

彼女は、住宅街から繁華街に足を進めた。

スナック……

水商売の彼女がいた時もあった。彼女のマンションに転がり込んで夜の世界を覗いた事もあった。店を手伝いながら、昼は仕事に行っていた。あの頃は睡眠時間は2～3時間だった。

何だか懐かしい。

ヤクザまがいの男に、脅かされたり、仲良くなったり……若気の至り……そんな言葉が似合っていた時代だった。

何で別れたんだっけ……

あまり考えたくなかった。

彼女は駅に戻っていた。

電車に乗る。

何しに、この駅に降りたのだろうか？ 僕と同じ育ち方をしてきたのだろうか？

電車は、ひとつ後ろのドアに飛び込んだ。彼女は流れる景色を見つめていた。

嫌な予感がしていた。

彼女が降りる駅はもしかしたら……

やはり、僕の妻の通っていた駅だった。

美味しい居酒屋もたくさんあり、妻とのデートは、もっぱらこのあたりだった。

彼女は、いったい何者なんだ。まるで、僕の過去ではないか？ 想像して楽しむ事などできない

。逆に恐怖を感じていた。

彼女はその後、よく飲みに行った店やデートした場所に立ち寄った。そして、また電車に乗った

。僕は、ほとんど機械的に後を付いて歩くしかなかった。気がつくやうな場所に戻っていた。

そして彼女は、初めて振り返った。

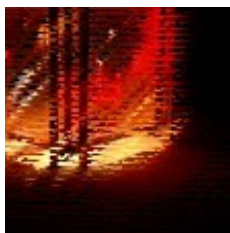
彼女の顔は真っ白だった。

表情がない……

無表情が僕に語りかける。

「最後によく、走馬灯を見るって言うでしょう？」

彼女の足元に、車にはねられた僕が横たわっていた。





## 「愛しきもの」

君島

恒星

その8ミリビデオのタイトルは「愛しきもの」だった。

高校の映画同好会の時に撮影した作品の中に、まぎれ込んでいた。これは、当時の監督をしていた英里のプライベート作品のようだった。

高校を卒業して大学生になった頃、英里と僕は同棲した。一年たたずに別れてしまったが.....  
部屋を片付けていた時、英里の持っていたと思われる8ミリビデオを発見したのだ。

見たい衝動にかられた。

しかし、8ミリビデオの再生機を持っていない。当時の同好会仲間に連絡を入れたが、みんな再生機を持っていない。もう過去の遺物なのだろうか？

最後に友達から聞きだして、英里に連絡した。

「あ、そこにビデオあったんだ！再生機ならあるわよ。一緒に見る？」

何でそんなに普通の会話ができるんだ？ 別れたんだぞ！ 元恋人同士だぞ！ 別れた原因？ 女ができたから.....自分の身勝手.....自分のせい.....

英里は、ある日突然、部屋から消えた。

それっきり連絡をしていなかった。

その時の女とは、すぐに別れた。

その後社会人になって3年目.....仕事に追われている。

安らぎが欲しかった。

「なんだ！あの頃から変わってないのね」

英里は僕の部屋に入ったとたん、そう言った。

6年間の空白を感じさせないように、振る舞っているのがわかる。

ビールと食べ物は駅前のデパートで買ってきた。よそよそしい乾杯.....会わない方がよかったのか？

映画同好会の作品を見る。今の洗礼されたテレビドラマには程遠いが、思い出が最高作品に仕立て上げていた。僕たちは昔話に没頭した。

「愛しきもの」を再生した。英里は急に黙った。

映像は、映画同好会のプロモーションビデオみたいなものだった。いや、違う。そこに映っているのは、ロケ中に動き回っている僕の姿だった。僕だけを撮影の合間に撮っていたのだ。ラストシーンで英里が自分で自分にカメラを向けた。

「どんなことがあっても、わたしはあなたが好きです！わたしの愛しきものです」  
映像が終わる。

「英里……学生の方は悪かった。僕がいい気になってたんだ。本当にごめん」  
英里は僕の目を見て言った。

「謝ってるの？本気？」  
「本気だよ。許してくれるなら、もう一度やり直したいんだ」  
英里はビデオを少し巻き戻した。映像は英里の自我撮りシーン。

「どんなことがあっても、わたしはあなたが好きです！わたしの愛しきものです」  
英里が僕の胸の中に、飛び込んできた。

